



大分県内の広範囲に大きな爪痕を残した記録的豪雨から 3 カ月。今も多くの人が仮住まいを続けています。

① みなし仮設と公営住宅に入居している被災者は 9 月 28 日現在で何市町の何世帯・何人ですか？

# 「ここに帰りたい」

みなし仮設と公営住宅に入居している被災者数		
日田市	44世帯	113人
由布市	17世帯	35人
九重町	15世帯	32人
大分市	5世帯	11人
玖珠町	4世帯	9人
合計	85世帯	200人

戸も窓もない。日田市天瀬町馬原の木工所従業員、高倉隆司さん(63)は2日、寂しげに自宅を見詰めた。台風対策で玄関や窓に取り付けてもらった木の板をポランテアが撤去すると、がらんとした室内がぞいだ。

7月7日の記録的豪雨で玖珠川が氾濫し、1階は背丈ほどの高さまで濁流が押し寄せた。母屋は片付けが終わり、浸水防止のかさ上げをして建て直そうと検討している。

2020年7月  
**豪雨**  
—ルポ 3カ月—  
②

5市町200人、今も仮住まい

## 孤立防止へ支援の動き

② 自宅が被災した日田市天瀬町の高倉隆司さん(63)は自宅の建て直しを検討していますが、どうすればいいか決めかねています。それはなぜでしょう？



被災した自宅の前で、台風対策の木の板を外す作業を見詰める高倉隆司さん(左)。母屋を建て替えるつもりだが、費用面がネックで決めかねている=2日、日田市天瀬町馬原

問題は費用だ。「最低1千万円はかかる。この年齢で借金をするの……」。棟続きの倉庫などを残して母屋だけ取り壊すと、行政の解体費補助の対象外になってしまう。

先祖代々の地を離れるつもりはない。どうすればいいか決めかねている。

県の集計では、豪雨で自宅が被災した県内5市町の85世帯200人(9月28日現在)が今も仮住まいを余儀なくされている。

家を借り上げた「みなし仮設住宅」や公営住宅で過ごす。このうち日田市が半数以上の44世帯113人に上る。

高倉さんも天瀬から約5キロ離れた市中心部のみなし仮設に入った。毎朝、軽トラックに愛犬「テロル」を乗せて自宅に通い、倉庫などの整理をして日が暮れたら戻る。「ほとんど寝に帰るだけ」。仕事復帰は片付けと田んぼの補刈りを終えてから思っている。

被災者支援活動に取り組みNPO法人リエラ(同市)の松永鎌矢代表(30)は、2017年7月の福岡・大分豪雨などでの経験



松永鎌矢代表 7月の福岡・大分豪雨などでの経験

を踏まえ「3カ月はこれまでの疲れや精神的な変化が出てくる時期だ」と指摘する。

被災直後からの激動が一段落し、周囲に知り合いがいない生活環境に寂しさを覚える人もいるという。

孤立防止には人同士の

新しい一歩を踏み出した人もいる。

同市西有田のみなし仮設で生活する元短大教員の権藤良子さん(64)は8月下旬から、市内の小



権藤良子さん 市内の小中学校で学芸員として働く

つなかりが鍵になる。「今後、みなし仮設への全戸訪問や交流会の開催を考えている」。息の長い支援を続ける覚悟だ。

自分で選んだ場所

③被災者を支援する動きも出ています。NPO法人「リエラ」の松永鎌矢代表(30)は何と話していますか??